トゥマク・チャラトゥについての解説

グルマーイの誕生日のセレブレーション・サッツァングで、ヴィジュ・クルカルニが、トゥマク・チャラトゥという 16 世紀の詩聖トゥルシーダースのバジャンを歌いました。このバジャンの中で、ラーマ神の熱烈な信奉者であるトゥルシーダースは、ラーマ神を幼い子どもとして非常に美しく、優しく描写しています。

サッツァングの後半、ムクタボーダ・インドロジカル学術調査研究所の理事長であるデイビッド・カッツが、このバジャンの中の教えの一つについて簡単な解説をしました。以下は、その解説です。

トゥルシーダースのバジャンの最後で、詩聖は言っています。「神の表情の美は無双である。ラーマ神は、ラーマ神自身とのみ比べることができるのだ」

トゥルシーダースが非常に雄弁に言葉にしたこの理解は、まさに驚くべきものではありませんか。考えてみてください。本当に神と比べることができるものは何でしょうか。

あなたは、神は太陽のようだと言うかもしれませんし、神は雲一つない青空、あるいは虹の色の集まりと言うかもしれません。神は無邪気な幼子の純粋さや甘美さを持っていると言うかもしれません。しかし、それらの描写のどれかで満足できるでしょうか？　どのようなアランカーラ――言葉による装飾や補飾――を使おうと、どのような直喩や隠喩を使おうと、あなたはいつも思うでしょう。「それよりもっとある」

このバジャンを読んで、あなたはこれをトゥルシーダースの困惑でもあると確信するかもしれません。彼は難問に直面していました。彼の心は敬愛の念に圧倒され、彼は神のイメージをたたえたいと思いました。彼は、ダルシャンの体験を言葉で表現したいと思いました。

そこで彼は、自然に目を向け、彼がそこに見いだした美に神をなぞらえようと試みました。しかし、彼が与えるそのイメージがいかに感情に訴える美しいものであろうと、完全に満足できるものは一つもありませんでした。そこで、そのバジャンの最後には、トゥルシーダースはこう言うしかないのです。「神は神である」

詩聖は歌います。「神の表情の美は無双である。ラーマ神は、ラーマ神自身とのみ比べることができるのだ」

バジャンのこの部分、極めて偉大な教えに焦点を当てることで、どのように十分にダルシャンを受け取るかを、神に出会った時にどのように認識するかを、そして神の神聖さと光輝の完全さをどのように知覚するかを、私たちは学ぶことができます。

バジャンのこの部分は、グルマーイの教えの一つを思い起こさせます。グルマーイは言っています。

> それぞれの個人が持つ独自性は、まさに神のエネルギーの欠くことのできない部分です。

© 2019 SYDA Foundation®. 著作権所有。